武蔵野日曜聖書講筵

ナザレ人たちの異端の首の第三回証言

――使徒行伝第24～26章――

１９９１年12月８日
小池辰雄

異端の歴史　隠れたる福音　新島襄と賀川豊彦　総督ペリクスとフェスト　カイザルに上訴
アグリッパへの弁明　聖霊の体験　伝道せざるを得ない

【使徒24】

1五日ののち大祭司アナニヤ数人の長老およびテルトロと云う弁護士とともに下りて、パウロを総督に訴う。2パウロ呼び出されたれば、テルトロ訴え出でて言う『ペリクス閣下よ、われらは汝によりて太平を楽しみ、3なんじの先見によりて此の国人のために時に随い処に随いて、悪しき事の改められたるを感謝して罷まず。4ここにくどくどしく陳べて汝を妨ぐまじ、願くは寛容をもて我が少しの言を聴け、5我等この人を見るに恰も疫病のごとくにて、全世界のユダヤ人のあいだに騒擾をおこし、且つナザレ人の異端の首にして、6宮をさえ瀆さんと為たれば之を捕えたり。8汝この人に就きて訊さば我らの訴うる所をことごとく知り得べし』9ユダヤ人も之に加えて誠にその如くなりと主張す。10総督、首にて示しパウロに言わしめたれば、答う『なんじが年久しく、この国人の審判人たることを我は知るゆえに、喜びて我が弁明をなさん。11なんじ知り得べし、我が礼拝のためにエルサレムに上りてより僅か十二日に過ぎず、12また彼らは、我が宮にても会堂にても市中にても人と争い、群衆を騒したるを見ず、13いま訴えたる我が事につきても証明すること能わざるなり。14我ただ此の一事を汝に言いあらわさん、即ち我は彼らが異端と称うる道に循いて我が先祖たちの神につかえ、律法と預言者との書とに録したる事をことごとく信じ、15かれら自らも待てるごとく義者と不義者との復活あるべしと、神を仰ぎて望みを懐くなり。16この故に、われ常に神と人とに対して良心の責なからんことを勉む。17我は多くの年を経てのち帰りきたり、わが民に施済をなし、また献物をささげいたりしが、18その時かれらは我が潔めをなして宮におるを見たるのみにて群衆もなく騒擾もなかりしなり。19然るにアジヤより来れる数人のユダヤ人ありて――もし我に咎むべき事あらば、彼らが汝の前に出でて訴うることを為べきなり。20或

はまた此処なる人々、わが先に議会に立ちしとき、我に何の不義を認めしか言え。21唯われ彼らの中に立ちて「死人の甦える事につきて我きょう汝らの前にて審かる」と呼ばわりし一言の他には何もなかるべし』
22ペリクスこの道のことを詳しく知りたれば、審判を延して言う『千卒長ルシヤの下るを待ちて汝らの事を定むべし』23斯て百卒長に命じ、パウロを守らせ、寛かならしめ、かつ友の之に事うるをも禁ぜざらしむ。
24数日の後ペリクスその妻なるユダヤ人の女ドルシラとともに来り、パウロを呼びよせてキリスト・イエスに対する信仰のことを聴き、25パウロが正義と節制と来らんとする審判とにつきて論じたる時、ペリクス懼れて答う『今は去れ、よき機を得てまた招かん』26斯てパウロより金を与えられんことを望みて尚しばしば彼を呼びよせては語れり。27二年を経てポルシオ・フェスト、ペリクスの任に代りしが、ペリクス、ユダヤ人の意を迎えんとしてパウロを繋ぎたるままに差措けり。

【使徒25】

1フェスト任国にいたりて三日の後、カイザリヤよりエルサレムに上りたれば、2祭司長ら及びユダヤ人の重立ちたる者ども、パウロを訴え之を害わんとして、3フェストの好意にて彼をエルサレムに召出されんことを願う。斯して道に待伏し、之を殺さんと思えるなり。4然るにフェスト答えて、パウロのカイザリヤに囚はれ在ることと己が程なく帰るべき事とを告げ、5『もし彼に不善あらんには、汝等のうち然るべき者ども我とともに下りて訴うべし』と言う。
6斯て彼処に八日十日ばかり居りてカイザリヤに下り、明くる日、審判の座に坐し、命じてパウロを引き出さしむ。7その出で来りし時、エルサレムより下りしユダヤ人ら、これを取囲みて様々の重き罪を言い立てて訴うれども証すること能わず。8パウロは弁明して言う『我はユダヤ人の律法に対しても宮に対してもカイザルに対しても罪を犯したる事なし』9フェスト、ユダヤ人の意を迎えんとしてパウロに答えて言う『なんじエルサレムに上り、彼処にて我が前に審かるることを諾うか』10パウロ言う『我はわが審かるべきカイザルの審判の座の前に立ちおるなり。汝の能く知るごとく我はユダヤ人を害いしことなし。11若しも罪を犯して死に当たるべき事をなしたらんには、死ぬるを厭わじ。然れど此の人々の訴うること実ならずば、誰も我を彼らに付すことを得じ、我はカイザルに上訴せん』12ここにフェスト陪席の者と相議りて答う『なんじカイザルに上訴せんとす、カイザルの許に往くべし』
13数日を経て後、アグリッパ王とベルニケとカイザリヤに到りてフェスト

の安否を問う。14多くの日留まりいたれば、フェスト、パウロのことを王に告げて言う『ここにペリクスが囚人として遺しおきたる一人の人あり、15我エルサレムに居りしときユダヤ人々の祭司長・長老ら之を訴えて罪に定めんことを願いしが、16我は答えて、訴えらるる者の未だ訴うる者の面前にて弁明する機を与えられぬ前に付すは、ロマ人の慣例にあらぬ事を告げたり。17この故に彼等ここに集まりたれば、時を延さず次の日審判の座に坐し、命じてかの者を引き出さしむ。18訴うる者、かれを囲みて立ちしが、思いしごとき悪しき事は一つも陳ぶる所なし。19ただ己等の宗教またはイエスと云う者の死にたるを活きたりとパウロが主張するなどに関する問題のみなれば、20斯る審理には我も当惑せし故、かの人に、なんじエルサレムに往き彼処にて審かるる事を好むかと問いしに、21パウロは上訴して皇帝の判決を受けん為に守られんことを願いしにより、命じて之をカイザルに送るまで守らせ置けり』22アグリッパ、フェストに言う『我もその人に聴かんと欲す』フェスト言う『なんじ明日かれに聴くべし』

23明くる日アグリッパとベルニケと大いに威儀を整えてきたり、千卒長ら及び市の重立ちたる者どもと共に尋問所に入りたれば、フェストの命によりてパウロ引き出さる。24フェスト言う『アグリッパ王、並びに此処に居る凡ての者よ、汝らの見るこの人はユダヤの民衆が挙りて生かしおくべきにあらずと呼ばわりて、エルサレムにても此処にても我に訴えし者なり。25然るに我はその死に当たるべき悪しき事を一つだに犯したるを認めねば、彼の自ら皇帝に上訴せんとする随にその許に送らんと決めたり。26而して彼につきて我が主の上書すべき実情を得ず。この故に汝等のまえ、特にアグリッパ王よ、なんじの前に引きいだし、尋問なしてのち、上書すべき箇条を得んと思えり。27囚人を送るに訴訟の次第を陳べざるは道理ならずと思う故なり』

【使徒26】

1アグリッパ、パウロに言う『なんじは自己のために陳ぶることを許されたり』ここにパウロ手を伸べ、弁明して言う、

2『アグリッパ王よ、我ユダヤ人より訴えられし凡ての事につきて今日なんじの前に弁明するを我が幸福とす。3汝がユダヤ人の凡ての習慣と問題とを知るによりて殊に然りとす。されば請う、忍びて我に聴け。4わが始めより国人のうちに又エルサレムに於ける幼き時よりの生活の状は、ユダヤ人のみな知る所なり。5彼等もし証せんと思わば、わが我らの宗教の最も厳しき派に従いて、パリサイ人の生活をなしし事を始より知れり。6今わが立ちて審かるるは、神が我らの先祖たちに約束し給いしことの希望に因りてなり。

7之を得んことを望みて我が十二の族は夜もひるも熱心に神に事うるなり。王よ、この希望につきて、我はユダヤ人に訴えられたり。8神は死人を甦えらせ給うとも、汝等なんぞ信じ難しとするか。9我もさきにはナザレ人イエスの名に逆いて様々の事をなすを宜きことと自ら思えり。10我エルサレムにて之をおこない、祭司長らより権威を受けて多くの聖徒を獄にいれ、彼らの殺されし時これに同意し、11諸教会堂にてしばしば彼らを罰し、強いて瀆言を言わしめんとし、甚だしく狂い、迫害して外国の町にまで至れり。12此のとき祭司長らより権威と委任を受けてダマスコに赴きしが、13王よ、その途にて正午ごろ天よりの光を見たり、日にも勝りて輝き、我と伴侶とを囲み照せり。14我等みな地に倒れたるにヘブルの語にて「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか、刺ある策を蹴るは難し」という声を我きけり。15われ言う「主よ、なんじは誰ぞ」主言い給う「われは汝が迫害するイエスなり。16起きて汝の足にて立て、わが汝に現れしは、汝をたてて其の見しことと我が汝に現れて示さんとする事との役者また証人たらしめん為なり。17我なんじを此の民および異邦人より救わん、又なんじを彼らに遣し、18その目をひらきて暗きより光に、サタンの権威より神に立ち帰らせ、我に対する信仰によりて罪の赦と潔められたる者のうちの嗣業とを得しめん」と。19この故にアグリッパ王よ、われは天よりの顕示に背かずして、20先づダマスコに居るもの次にエルサレム及びユダヤ全国、また異邦人にまで悔改めて神に立ちかえり、其の悔改にかなう業をなすべきことを宣べ伝えたり。21之がためにユダヤ人、われを宮にて捕え、かつ殺さんとせり。22然るに神の祐によりて今日に至るまで尚存えて、小なる人にも大なる人にも証をなし、言うところは預言者およびモーセが必ず来るべしと語りしことの外ならず。23即ちキリストの苦難を受くべきこと、最先に死人の中より甦える事によりて民と異邦人とに光を伝うべきこと是なり』

24パウロ斯く弁明しつつある時、フェスト大声に言う『パウロよ、なんじ狂気せり、博学なんじを狂気せしめたり』25パウロ言う『フェスト閣下よ、我は狂気せず、宣ぶる所は真にして慥なる言なり。26王は此等のことを知るゆえに我その前に憚らずして語る。これらの事は片隅に行われたるにあらねば、一つとして王の眼に隠れたるはなしと信ずるに因る。27アグリッパ王よ、なんじ預言者の書を信ずるか、我はなんじの信ずることを知る』28アグリッパ、パウロに言う『なんじ説くこと僅にして我をキリステアンたらしめんと為るか』29パウロ言う『説くことの僅なるにもせよ、多きにもせよ、神に願うはただに汝のみならず、凡て今日われに聴ける者の、この縲紲なくして我がご

とき者とならんことなり』
30ここに王も總督もベルニケも、列座の者どもも皆ともに立つ、31退きてのち相語りて言う『この人は死罪または縲紲に当たるべき事をなさず』32アグリッパ、フェストに言う『この人カイザルに上訴せざりしならば釈さるべかりしなり』

●異端の歴史

24章です。

1五日ののち大祭司アナニヤ数人の長老およびテルトロと云う弁護士ともに下りて、パウロを総督に訴う。2パウロ呼び出されたれば、テルトロ訴え出でて言う『ペリクス閣下よ、われらは汝によりて太平を楽しみ、3なんじの先見によりて此の国人のために時に随い処に随いて、悪しき事の改められたるを感謝して罷まず。4ここにくどくどしく陳べて汝を妨ぐまじ、願くは寛容をもて我が少しの言を聴け、5我等この人を見るに恰も疫病のごとくにて、全世界のユダヤ人のあいだに騒擾をおこし、且つナザレ人の異端の首にして、6宮をさえ瀆さんと為たれば之を捕えたり。

「騒擾をおこし」といっても、パウロが騒ぎを起こしたのではない。彼等が騒いだんです。この言い方は全然けしからん。だから、ひとつも証言にならない。偽りの証言です。

「ナザレ人の異端の首」

とは、原語では

「ナザレ人たちの」

なんです。キリストのお弟子さんたち、それを「ナザレ人たち」ということで、複数になっている。要するに、キリストの信者たち、クリスチャンということです。ナザレ人キリストは、ユダヤ教からいうと、これは「異端」だから。そのナザレ人たちの――キリストはもういないんですから――これはユダヤ教に対する異端だから、異端の首。正に、キリストはユダヤ教に対する異端ですよ。パウロは、この場合、キリストの代わりに異端の首になっているわけだ。

内村先生が教会の異端なんだ。フスやルターがカトリックの異端なんです。いわゆる「正統」から、本当の世界を告白する人、戦う人、これはみんな「異端」と言われる。だから、キリスト教史において、実は、

「異端の歴史」

が福音の本当の歴史なんだ。妙なものだね。最初にして最大の異端はキリストだ。だから、十字架に懸けられた。ですから、異端の歴史というのは面白いんです。

私も異端だ、無教会の。手島さんも私も無教会の異端なんだ。彼等は、

「手島と小池は内村から違った事を始めた」と、特に、手島さんなんか火渡りなんかするものだから、なおさら。正に異端にされてしまった。

要するに、本当の真理は少数者で、この少数者がみんな異端なんです。異端が本当の正統なんです、神さまの目から見ると。妙なもんだね。

政界でも実業界でも、本当に真面目にやっている人がみんな下積みになっている。

「偽りの奴が栄えるのは何故ですか、正しき者を認めざるは何事か」

と、エレミヤが神さまに食ってかかっている。そして、預言者たちもみな異端なんだ。全くの異端もいますよ。異端にも二種類あるけれども。しかし、この神さまの前の本ものがむしろ異端なんだ。

「わが名のために人々に憎まれる」

と。憎まれた人たちは異端であって、実は本当なんだ。

だから、この5節は「ナザレ人たち」ですよ、

「ナザレ人イエスのお弟子さんたちという、そういう異端の親玉であるところのパウロ」

ということです。

6 **宮をさえ瀆さんと為たれば之を捕えたり。**

エルサレムの神殿を瀆したのではない。パウロは宮を問題としていないわけです。キリストもそうなんだ。なにも宮を壊したり、瀆したりしているわけではない。神殿で、キリストももちろん祈った。神殿だから祈るのではなくて、祈った所がたまたま神殿であるというだけのはなし。すべて、問題は内側が問題なんです。内側が本ものならば、外側が何であってもなくてもどちらでも結構です、というわけだ。

8 **汝この人に就きて訊さば我らの訴うる所をことごとく知り得べし』** 9 **ユダヤ人も之に加えて誠にその如くなりと主張す。**

一緒にいたユダヤ人も、テルトロの証言に加えて、なおさら皆でもって、間違った偽りの証言をやっているわけだ。

10 **総督、首にて示しパウロに言わしめたれば、答う『なんじが年久しく、この国人の審判人たることを我は知るゆえに、喜びて我が弁明をなさん。** 11 **なんじ知り得べし、我が礼拝のためにエルサレムに上りてより僅か十二日に過ぎず、** 12 **また彼らは、我が宮にても会堂にても市中にても人と争い、群衆を騒したるを見ず、** 13 **いま訴えたる我が事につきても証明すること能わざるなり。** 14 **我ただ此の一事を汝に言いあらわさん、即ち我は彼らが異端と称うる道に循いて我が先祖たちの神につかえ、律法と預言者との書とに録したる事をことごとく信じ、**

自分は、彼らが異端と言っている道に従っていると。ところが、

「この異端といわれるところの道に従うと、実は、旧約を本当の意味では、我々は尊重しているんだ」

ということを、パウロは言っているわけです。道に従って、ユダヤ教に反したわけではないんだと。

●隠れたる福音

これを、今度は、私の体験から言わしてもらうと、無教会が私のことを異端視した。けれども、無教会よりももっと私は、彼らが言うところの異端というそのところにおいて、自分は本当に「律法と預言者」を受けとっている。私にとっては「律法」はいわゆる律法ではない。隠れたる福音です。

「汝、殺すべからず」

ではない。

「汝は殺人はしない」

という、あのモーセの十誡でも、私にとっては、隠れたる福音なんです。神さまはイスラエルの民を信じて、「殺すべからず」ではない、

「お前たちは殺人はしない。私がお前の神だから、殺人なんかするはずがない」

というのが、本当のヘブライ語の元の意味なんです。ところが、これを律法にしてしまったんだ、歴史的に。こんな事を言うのは他にいないらしいね、私みたいなことを言うのは。パウロも、

「律法の義については責むべきところなし」

なんて言って、パウロが律法を守っていた、その守り方は外側なんです。

「キリストが来てから、それは間違っていたことが、自分は分かった」

と。けれども、本当に律法を守るということが内側からならば、

「律法は聖なるものにして、律法を守る人は救われる」

んです。永遠の生命を持つ。それを、律法を本当に守ったのはキリストの他にいないんだ。

親子の関係で、「すべし、すべからず」だったら、親子の関係は成り立たない。

「お前はよく勉強するね」

なんだ、「勉強せよ」ではない。

「よく学び、よく遊ぶことをやっているね」

と、信頼して親が言うと、信頼された子供の方は、

「どうも、親が言うほどではないから、これはしっかりしなければいかん」

と、やる。

「勉強しろ」

なんて言われると、

「少し遊んでやれ」

と、逆になる。いわゆる

「律法は罪を刺激する」

というでしょ。

親子関係も、神さまと人との関係も、信頼、信愛関係でなかったら、全部、成り立たない。労使関係だってそうですよ。組合なんか要らないんだ、本当は。組合なんて要るのは、本当の信愛関係がないから。それで、権利を主張することになる。情けないですよ、人間の世界は。先生と生徒の間でも、労使の関係でも、一番大事なのは信愛関係だ。信じ愛する関係。これが本当の福音で、律法の根本精神は、実はそういう信愛であった。

モーセの十誡は本当は、

「お父さんお母さんを敬うね」

というんだ。

「父母を敬え」

ではない。だから、私は

「隠れた福音」

という。預言者も、もちろんそうです。

無教会の先生方は非常に預言書が好きでした。私も好きです。けれども、預言書の読み方は、聖霊が来てから、もっと深くなっている。イザヤ書がいかに素晴らしいかは、聖霊が来てから本当に分かった。内村鑑三、藤井武に負けはしませんよ、その点で。質的にこっちの方が上なんだから。そんなことを言ってはおかしいけれども。

●新島襄と賀川豊彦

この頃、新島襄の伝記を呼んで、私は驚いた。新島襄さんは偉い人だね。新島襄と賀川豊彦には私は驚嘆している。無教会の先生方よりか、彼らの方が本当にキリストの弟子ですよ。無教会の先生方はキリストの弟子ではない、とは言いやしない。けれども、彼らの在り方は本当に福音の世界だな。

吉田松陰が国禁を犯して、とっ捕まってしまって、とうとう殺されてしまったけれども、あの後から、新教の先駆者は新島襄だね。私は知らなかったな。彼が立ち上がったのは、明治の前だからね。そして、密かに、アメリカの船に乗って、船長がよく同情してくれたんだな、そして、皿洗いやお手伝いをやりながら、インド洋を渡って、南アフリカを通って、大西洋を渡って、ボストンに着いたんだね。何か月もかかっている。あのいろんな苦労というものは大変なもんだ。上海で船を乗り換えているけれども。そして、向こうへ行って、キリスト教でなければ本当の教育はできないという事をはっきり知って、

「自分はどうしてもキリスト教の大学を建てる」という。新島襄のあの建設精神を、今の同志社の人たちは本当に受け継いでいるかどうかは知らんよ。新島襄と賀川豊彦を私は読んで、もう本当に参ったね、この二人には。

そういうわけで、無教会よりも、私はもっと深く信じた。

15 **かれら自らも待てるごとく義者と不義者との復活（よみがえり）あるべしと、神を仰ぎて望みを懐（いだ）くなり。**

これは、パリサイだからなおさら、サドカイと違って、パウロは天使も復活も全部初めから信じていた。

16 **この故に、われ常に神と人とに対して良心の責なからんことを勉む。**

私は、無教会への弁明としては、パウロのこの言葉を使いたいくらいです。ここの所は、面白いなぁと思って読んでいた。

「異端ではありませんよ、冗談言うな」

と。私はとにかく無教会の流れにいたでしょ。こんな事を言ってはおかしいけれども、大きな意味でいう無教会では、今は、私は最年長なんです。みんなもう仆れてしまった。聖霊の力はいかに凄いかを、私は実証してやるんだから。言いたくはないけれども、無教会の方々は

「自分の信仰」

なんて言って、

「無教会信仰」

と言ってやっているものだから、信仰が放物線に、下降の線になってしまう。私の、我々の信仰は、逆に、上昇カーブなんです、聖霊の世界は。

「外なる人は破れても内なる人は日々に新たなり」

と、パウロが言ったのはこのことなんです。内なる人、聖霊の人は日々に新たなりと。賀川豊彦でも、新島襄でも、もの凄いエネルギーがある。みんな、この御霊の力です。いわんや、パウロにおいては大変なもんです。普通なら、もうみんな倒れていますよ、パウロのこれほどの艱難に遭ったら。ところがどっこいだ。

●総督ペリクスとフェスト

「ちっとも騒がしたのではないぞ、冗談言うな」

ということをパウロは言っている。

17 **我は多くの年を経てのち帰りきたり、わが民に施済（ほどこし）をなし、また献物（ささげもの）をささげいたりしが、** 18 **その時かれらは我が潔めをなして宮におるを見たるのみにて群衆もなく騒擾（さわぎ）もなかりしなり。** 19 **然るにアジヤより来れる数人のユダヤ人ありて――もし我に咎（とが）むべき事あらば、彼らが汝の前に出でて訴うるこ**

とを為べきなり。20或はまた此処なる人々、わが先に議会に立ちしとき、我に何の不義を認めしか言え。21唯われ彼らの中に立ちて「死人の甦える事につきて我きょう汝らの前にて審かる」と呼ばわりし一言の他には何もなかるべし』

22ペリクスこの道のことを詳しく知りたれば、審判を延して言う『千卒長ルシヤの下るを待ちて汝らの事を定むべし』23斯て百卒長に命じ、パウロを守らせ、寛かならしめ、かつ友の之に事うるをも禁ぜざらしむ。

24数日の後ペリクスその妻なるユダヤ人の女ドルシラとともに来り、「ドルシラ」というのは、ヘロデ・アグリッパの第三番目の女ということだ。

パウロを呼びよせてキリスト・イエスに対する信仰のことを聴き、25パウロが正義と節制と来らんとする審判とにつきて論じたる時、ペリクス懼れて答う『今は去れ、よき機を得てまた招かん』

ペリクスは、ちょっと自分の痛いところを突かれているようなものだから。彼は多少不義な結婚をしているんです。

26斯てパウロより金を与えられんことを望みて尚しばしば彼を呼びよせては語れり。27二年を経てポルシオ・フェスト、ペリクスの任に代りしが、ペリクス、ユダヤ人の意を迎えんとしてパウロを繋ぎたるままに差措けり。

二年間、パウロをつないだまま差し置いて、フェストにバトンタッチしてしまう。フェストが今度は代わりに総督になるわけです。ペリクスは、パウロは相手にするとやっかいなものだから、逃げてしまったわけだ。

25章です。

1フェスト任国にいたりて三日の後、カイザリヤよりエルサレムに上りたれば、2祭司長ら及びユダヤ人の重立ちたる者ども、パウロを訴え之を害わんとして、3フェストの好意にて彼をエルサレムに召し出されんことを願う。斯して道に待伏し、之を殺さんと思えるなり。

この前も、やったね、同じようなことを。どうせ、自分たちが勝手な理屈をつけているものだから、あいつをやっつけてしまえ、とこういうわけだ。

4然るにフェスト答えて、パウロのカイザリヤに囚われ在ることと己が程なく帰るべき事とを告げ、5『もし彼に不善あらんには、汝等のうち然るべき者ども我とともに下りて訴うべし』と言う。

6斯て彼処に八日十日ばかり居りてカイザリヤに下り、明くる日、審判の座に坐し、命じてパウロを引き出さしむ。7その出で来りし時、エルサレムより下りしユダヤ人ら、

この「ユダヤ人ら」というのは、パウロをペリクスに訴えたご連中です。

これを取り囲みて様々の重き罪を言い立てて訴うれども証すること能わず。
8**パウロは弁明して言う『我はユダヤ人の律法に対しても宮に対しても**
カイザルに対しても罪を犯したる事なし』

●カイザルに上訴

9**フェスト、ユダヤ人の意を迎えんとしてパウロに答えて言う『なんじエル**
サレムに上り、彼処にて我が前に審かるることを諾うか』10**パウロ言う『我**
はわが審かるべきカイザルの審判の座の前に立ちおるなり。汝の能く知るご
とく我はユダヤ人を害いしことなし。11**若しも罪を犯して死に当たるべき事**
をなしたらんには、死ぬるを厭わじ。然れど此の人々の訴うること実ならずば、
誰も我を彼らに付すことを得じ、我はカイザルに上訴せん』12**ここにフェス**
ト陪席の者と相議りて答う『なんじカイザルに上訴せんとす、カイザルの許
に往くべし』

「カイザルに上訴せん」とは、要するに、ローマに行くということです。ローマでも大いにやってやろうと思ったんだ。けれども、相手はネロだから、どんなに正しくても、パウロは殉教の死を遂げることはもう覚悟している。そこにも書いてある。

「カイザルに上訴しなければお前は助かったのに」

と。「悪い奴だ、あのカイザルは。我々はまだ道理がわかるけれども、あのカイザルは分からないから」と、そこまでは言わないけれども、そういう意味なんです。

13数日を経て後、アグリッパ王とベルニケとカイザリヤに到りてフェスト
の安否を問う。

「アグリッパ王」というのは、ヘロデ王家の最後の人です。今度は、アグリッパの前で、パウロは弁明するわけです。

14多くの日留まりいたれば、フェスト、パウロのことを王に告げて言う『こ
こにペリクスが囚人として遺しおきたる一人の人あり、15**我エルサレムに居**
りしときユダヤ人々の祭司長・長老ら之を訴えて罪に定めんことを願いしが、
16**我は答えて、訴えらるる者の未だ訴うる者の面前にて弁明する機を与えら**
れぬ前に付すは、ロマ人の慣例にあらぬ事を告げたり。

パウロはローマ人だからね。

17**この故に彼等ここに集まりたれば、時を延さず次の日審判の座に坐し、命**
じてかの者を引き出さしむ。18**訴うる者、かれを囲みて立ちしが、思いしご**
とき悪しき事は一つも陳ぶる所なし。

要するに、ローマ法に照らしてみると、悪い事は一つもしていないと。

19**ただ己等の宗教またはイエスと云う者の死にたるを活きたりとパウロが主**

張するなどに関する問題のみなれば、20斯る審理には我も当惑せし故、
そういう審判はできないんだと。審判は、どこまでもローマ法に触れるか触れないかだけのはなしなので、内容がどうだこうだではないんだ、とこういうわけです。
かの人に、なんじエルサレムに往き彼処にて審かるる事を好むかと問いしに、21パウロは上訴して皇帝の判決を受けん為に守られんことを願いしにより、命じて之をカイザルに送るまで守らせ置けり』
その点で、パウロは、また賢明でもあった。そうでなかったら、またユダヤ人にとっ捕まって、ヘタすると、殺されてしまう。
22アグリッパ、フェストに言う『我もその人に聴かんと欲す』フェスト言う『なんじ明日かれに聴くべし』
23明くる日アグリッパとベルニケと大いに威儀を整えてきたり、千卒長ら及び市の重立ちたる者どもと共に尋問所に入りたれば、フェストの命によりてパウロ引き出さる。24フェスト言う『アグリッパ王、並びに此処に居る凡ての者よ、汝らの見るこの人はユダヤの民衆が挙りて生かしおくべきにあらずと呼ばわりて、エルサレムにても此処にても我に訴えし者なり。
彼らが勝手なことを言っている、ということは、
「異端のキリストの弟子たちの首で、ユダヤ教から反するからとんでもない、こいつは生かしておくべきものではない」
と。ユダヤ教に反するからと、彼らがいきり立ったのは、結局そのことです。
25然るに我はその死に当るべき悪しき事を一つだに犯したるを認めねば、
どうも分からんと。そんな宗教上のことはどうであろうと、悪いことは一つもしていないと。
彼の自ら皇帝に上訴せんとする随にその許に送らんと決めたり。
まぁとにかく、話は聞こうと、それだけのはなし。
26而して彼につきて我が主の上書すべき実情を得ず。
「主」というのは、ネロ、皇帝のことですよ。
この故に汝等のまえ、特にアグリッパ王よ、なんじの前に引きいだし、尋問なしてのち、上書すべき箇条を得んと思えり。27囚人を送るに訴訟の次第を陳べざるは道理ならずと思う故なり』
とにかく、一応、内容を聞いてくれということになったのだ、と。それが26章になるわけです。

●アグリッパへの弁明

1アグリッパ、パウロに言う『なんじは自己のために陳ぶることを許されたり』ここにパウロ手を伸べ、弁明して言う、

2『**アグリッパ王よ、我ユダヤ人より訴えられし凡ての事につきて今日なんじの前に弁明するを我が幸福とす。3汝がユダヤ人の凡ての習慣と問題とを知るによりて殊に然りとす。されば請う、忍びて我に聴け。4わが始より国人のうちに又エルサレムに於ける幼き時よりの生活の状は、ユダヤ人のみな知る所なり。**

「国人」とは、タルソの故郷のことです。みな、よく知っていますよと。

5彼等もし証せんと思わば、わが我らの宗教の最も厳しき派に従いて、パリサイ人の生活をなしし事を始めより知れり。

自分はパリサイのチャンピォンだ、モーセの律法をよく知っているし、よく守って来たんだと。

「ヘブル人中のヘブル人だ」

と、パウロは別の所で言っています。ピリピ書だったかな。

6今わが立ちて審かるるは、神が我らの先祖たちに約束し給いしことの希望に因りてなり。

そういう望みを持っているのに、裁かれるのは冗談じゃないと。「希望」というのは、メシヤが現れるということです。そして、

「ユダヤ人はメシヤが現れるという希望を持っているけれども、しかし、メシヤはキリストにおいて既に現れた。それを彼らは受けとらない。キリストこそメシヤだ」

と。そのことを、今、弁明しようと思っている。望みとはそのことです。

今のユダヤ人もそうなんです。

「まだメシヤは来ていないから、メシヤの来るのを望み待っている。あのイエスはメシヤではない。あれは預言者の一人だ」

と、こういうわけです。頑固だね、ユダヤ人というのは、今でもそうなんだ。とにかく、頑固さ加減は、

「項こわき民」

と言われている通りです。「キリストも、パウロも間違っている」と言うんだからね。

7之を得んことを望みて我が十二の族は夜もひるも熱心に神に事うるなり。王よ、この希望につきて、我はユダヤ人に訴えられたり。

同じ希望のために訴えられたんだと。パウロは、

「この希望は既に成就している、キリストにおいて成就している。望みは成就しているのに、彼らはまだ望んでいるというんだから、冗談言うな」

と。彼らは

「成就していない」

という。これが、大反対なんだ。対立しているのは、その一点なんです。面白いね、この「希

望」という言葉は。その望みのために訴えられた。

8 **神は死人を甦えらせ給うとも、汝等なんぞ信じ難しとするか。**

「キリストが甦ったではないか、その甦りのキリストに私はでっくわしたんだ」と、その事をこれから言おうとしている。これはもう、三回目ですよ。9章22章、26章。だから、私は今日、「異端の首の第三回証言」と書いた。もう、はっきりしているんだ、パウロは。「甦ったではないか、なんで信じ難きとするか。そのことはユダヤ教のときも、大体パリサイは信じたではないか」と。

9 **我もさきにはナザレ人イエスの名に逆いて様々の事をなすを宜きことと自ら思えり。**

「私は、キリストに逆らっていたとんてもない奴だ、いわゆるナザレ人たちをとっ捕まえて牢屋に入れて、死人をも出してしまったんだ、私は悪い奴なんだ」と。

10 **我エルサレムにて之をおこない、祭司長らより権威を受けて多くの聖徒を獄にいれ、彼らの殺されし時これに同意し、**11 **諸教会堂にてしばしば彼らを罰し、強いて瀆言を言わしめんとし、甚だしく狂い、迫害して外国の町にまで至れり。**

「私は、そういう悪い過去を持っているんですよ」と。ところが、ユダヤ人はそれをよしとしているんだ。あれは良かったんだと。

12 **此のとき祭司長らより権威と委任を受けてダマスコに赴きしが、**13 **王よ、その途にて正午ごろ天よりの光を見たり、日にも勝りて輝き、**

これはもう、太陽の光とは違うんだと。

我と伴侶とを囲み照らせり。14 **我等みな地に倒れたるにヘブルの語にて「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか、刺ある策を蹴るは難し」という声を我**

きけり。

この「刺ある策を蹴るは難し」という言葉は、今回初めて出てきた言葉です。どれが本当で、どれが嘘だ、と、そうじゃないですよ。全部、本当なんですよ、パウロの告白は。一度に全部を言ってやしないんだから。

15 **われ言う「主よ、なんじは誰ぞ」主言い給う「われは汝が迫害するイエスなり。**16 **起きて汝の足にて立て、わが汝に現れしは、汝をたてて其の見しことと我が汝に現れて示さんとする事との役者また証人たらしめん為なり。**

ここらは、もうパウロはアグリッパに、事の次第の細かい事よりも、どういう目的で行ったかを口早に言ってしまったわけだ。それで、彼は三日三晩、目が見えず、耳が聞こえず、ものが言えずというわけで、そこまではここでは書いてないけれども。

17 **我なんじを此の民および異邦人より救わん、又なんじを彼らに遣し、**18 **その目をひらきて暗きより光に、サタンの権威より神に立ち帰らせ、我に対する**

信仰によりて罪の赦と潔められたる者のうちの嗣業とを得しめん」と。

そういうような目的でもって、私はキリストにとっ捕まったんですと。

19**この故にアグリッパ王よ、われは天よりの顕示に背かずして、20先づダマスコに居るもの次にエルサレム及びユダヤ全国、また異邦人にまで悔改めて神に立ちかえり、其の悔改にかなう業をなすべきことを宣べ伝えたり。**

それはもう、

「自分は完全にひっくり返された。このキリストに、どんな事があろうと、誰が何と言おうと、この事実に背くわけにはいかない。ダマスコ途上のあの体験は、誰が何と言おうと、これは否定することができない。それをもし否むならば、キリストを否むことになるから、そんなことは俺にできるか」

というんだ、パウロは。それはそうですよ。あのパウロの強さはそこにあるんだ、このはっきりしたひっくり返りが。それはそうです。

●聖霊の体験

私が阿蘇でもって、キリストの光に撃たれて、身体がちょっと浮き上がって、全身が痺れてぶっ倒れた。あの聖霊の体験は、誰が何と言おうとも、これを否定するわけにいかんです。だから、変わってしまったんだからな、無教会とは。帰りに、聖書のベールが取れてしまった。

「無教会信仰ではダメだ」

ということがはっきりしたから。

内村先生も、聖霊のことは書いてますよ、藤井先生も。「について」書いていたってダメなんです。「その中から」本当にものを言わなければ。論文や何かで、よく、何々「について」というのがあるね。「について」ではないんだ。「中から」言わざるを得ない、というのが本当の世界です。「伝道」というのはそういうことなんだ。告白なんだ。

誰が何と言おうと、言わざるを得ない。それを「騒がす」と言っているが、そうではない。

「自分たちが騒いで、私の本当の告白を受けとらないで、人を騒がす騒がすなんて言っているのは、とんでもない話だ。彼らはこれを、天下を騒がすとんでもないやつだというけれども、騒がしているのは自分たちだ」

というわけです。

キリストが本当の異端の首で、パウロはその次なんだ。パウロは「ナザレ人たちの異端の首」。キリストを信ずる者たちの異端のかしら。ナザレ人イエスが最大の異端者、ユダヤ教に対して。だから、

「本当の歴史は異端の歴史だ」

と言っている。異端が正統史なんだ。それが証明する。人の証明なんかいらん。これはもう、

聖霊と御言の権威というものは、他のものはどうにもならんです。

新約聖書は凄いよ、本当に。無駄がないね、この新約聖書というのは。マタイ伝1章は、ちょっと、たくさんあんな系譜が書いてあるが――あれで大体つまずくんだよな、あんなキリストの系譜なんて――だけれども、あの中に三人の正統でない女の人がいる。そんな事は問題でないんだ、ということを、そこで見なくてはいけない。

賀川豊彦が妾の子だといって、あの妾なるお母さんが本当は素晴らしい女性だったんだ。だから、賀川豊彦が出てきたんだ。

だから、平伏して悔い改めて、平伏して神に立ち帰れ、と。

「立ち帰れ、立ち帰れ」

とは、預言者がしょっちゅう言っていた言葉なんだ。どの預言者も、

「神に帰れ、神に帰れ」

と。「帰れ」ということは、「に向かって行け」ということですよ。ヘブライ語では「シューブ」という。

「方向転換してそっちへ向け、転向せよ」

ということ。磁石が北を指すように、我々はキリストという天極を指して動いていかなくては。「指して」ではない、「吸いつかれ」ているんだ、磁石のように。磁極が天界にあるからね。「自分の信仰で」なんて、そんなことを言っているんではない。

「汝の信仰、汝を救えり」

と、キリストが言われたが、うっかりすると、あれは困るんだ。

「私はまだ信仰がうすいから、『汝の信仰で救われる』まで、なかなか大変です」

なんて、そんなことしたら、くたびれてしまうよ。「汝の信仰」とは、

「お前が、こんなに私を受けとっていることが救となったんだよ」

ということ。その「受けとる」のは、実は「受けとらせられている」わけだ、上からの力で。

「信仰」とは何かというと、

「キリストの愛が自分を動かしている」

ということが、信仰なんだ。何か、「信仰」というのは、こっち側からつくって、いわゆる「信念」だなんて思ったら、そうじゃないよ、信仰なんてのは。それだから、私は

「信仰なんかありません、恵みだけです」

と言う。逆説的な言葉だね。恵みの力、恵みが先なんだ。恵信という。

「恵みあり、信仰あり」

ということが、ちゃんとエペソ書に出ている。恵みが先なんだ、もちろん。上からの力が、上からの光が来ないで、神の愛が来ないで、なぜ、本当の愛が動けるか。ヨハネ書翰にも、散々書いてある。

皆さん、そうでしょ。だから、楽なんですよ、我々は。何も力む必要はない。太陽の光

が来ているから、蛍光灯は要らないんだ、本当は。太陽の光ですべてのものを見ているんだから。太陽の光が無かったら、見えないんだ、いくらいい目していたって。それくらいにキリストというものに圧倒されなければダメですよ。

「私はもうキリストに圧倒されて活きています」

と。いいですか、皆さん。本当にキリストにひっぱり回されて進んで行く。ひっぱり回されているけれども、ひっぱり回されていることは同時に、力が来ていることなんです。それは動物ではないから。

●伝道せざるを得ない

パウロは、

「まずダマスコに居る者、それからエルサレムの者、みんな私は片っぱしから、立ち帰れ、立ち帰れとしゃべって来たんだ」

と。

21之がためにユダヤ人、われを宮にて捕え、かつ殺さんとせり。22然るに神の祐（たすけ）によりて今日に至るまで尚（なおながら）存えて、小なる人にも大いなる人にも証をなし、言うところは預言者およびモーセが必ず来るべしと語りしことの外ならず。23即ちキリストの苦難（くるしみ）を受くべきこと、最先（いやさき）に死人の中より甦える事によりて民と異邦人とに光を伝うべきこと是なり』

それで、パウロは、

「私は三次の伝道を散々やってきた。もう、語らざるを得ない、動かざるを得ない、伝道せざるを得ない」

というわけだ。全部、「ざるを得ない」世界です。「ねばならない」ではない。

雨が降れば、地は濡れざるを得ない。風が吹けば、木の葉は揺れざるを得ない。そういう世界。自然界と同じなんだ、この本当の霊界は。道徳界だけはダメなんだよ。

「こうしようか、ああしようか」

と、しょっちゅう選択している。くたびれてしまう。

勉強せざるを得ない。子供は遊ばざるを得ない。聴かざるを得ない。語らざるを得ない。みな、ざるを得ない。ヒルティも、どこかで言っている。

「ニッヒト　アンデレス　ケネン」（ファ　ザン　アイ　ドゥー、他に為すわけにいかない）

「かくせざるを得ないというのが本当の世界だ」

と。そのとおり。

24パウロ斯く弁明しつつある時、フェスト大声に言う『パウロよ、なんじ狂気せり、博学なんじを狂気せしめたり』

「博学なんじを狂気せしめたり」と、何を言っているか。「狂えるなり」ならば、パウロは
「私は神さまのためには狂っていますよ」
と、別な所で言っている。
「神のためには狂えるなり」
と。

25**パウロ言う『フェスト閣下よ、我は狂気せず、宣(の)ぶる所は真(まこと)にして慥(たしか)なる**
言なり。26王は此等のことを知るゆえに我その前に憚(はばか)らずして語る。これら
の事は片隅に行われたるにあらねば、一つとして王の眼に隠れたるはなしと
信ずるに因る。27アグリッパ王よ、なんじ預言者の書を信ずるか、我はなん
じの信ずることを知る』28アグリッパ、パウロに言う『なんじ説くこと僅(わずか)に
して我をキリステアンたらしめんと為るか』29パウロ言う『説くことの僅な
るにもせよ、多きにもせよ、神に願うはただに汝のみならず、凡て今日われ
に聴ける者の、この縲紲(なわめ)なくして我がごとき者とならんことなり』

パウロは、もう、喰ってかかっているよ。相手がもう問題にならない。
「私のようになりなさいよ。ただこの縲紲だけは、あなた方は要らないけれども」
と。愉快だね。完全に勝っているからね、パウロは。本当の権威をもって、ものを言っているから、御霊の権威で。
「キリスト一人が味方ならば、千万人といえども我往かん。一つも恐いことはない。凡て今日われに聴ける者の、この縲紲なくして我がごとき者とならんことこそ、自分の本当の悲願だ」
と。

30**ここに王も總督もベルニケも、列座の者どもも皆ともに立つ、31退きての**
ち相語りて言う『この人は死罪または縲紲に当るべき事をなさず』

なるほどそうだと。死罪でもなければ、縲紲に当たることでもない、ユダヤ人が間違っていると。

32**アグリッパ、フェストに言う『この人カイザルに上訴せざりしならば釈(ゆる)さ**
るべかりしなり』

「カイザルに上訴するなんて言わなければ、これで無罪放免だったのに、まだカイザルに行く、なんて言っているから、仕方がない、ローマに送ろう」
と。パウロは完全に勝ってしまったな。もう大変なもんだ。
皆さんも、キリストの福音の権威というものは、凄いものだ。
「力がきて楽しくてしょうがない」
といって進んでゆく。
時間も来ましたので、急ぎ足でしたが、これで終わります。